



38. S K 23 土坑検出（北から）



39. S E 05 井戸 断面断位（東から）



40. S E 05 井戸完掘（東から）



41. S E 09 井戸・粘土ブロック・集石検出（南東から）



42. S E 09・S K 95 断面層位（南東から）



43. S E 09 井戸完掘（東から）



44. S E 01 完掘及び断面層位（北から）



45. S E 10 井戸完掘（南から）



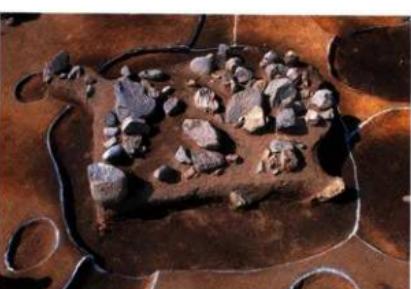
46. S E 06 井戸検出



47. S E 06 井戸 珠洲・白磁・礫検出（北から）



48. S E 06 井戸 完掘（南から）



49. S E 07 井戸 棘検出（東から）



50. S E 07 井戸 茶臼出土（東から）



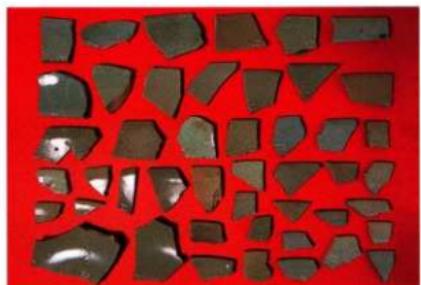
51. S E 07 断面層位（東から）



52. S E 07 井戸 井戸枠内出土の棘（東から）



53. S E 07 井戸 完掘（東から）



54. 青磁 碗（内面）



55. 同左（外面）



56. 青磁 碗・皿（内面）



57. 青磁 盘・香炉



58. 白磁 碗・壺（内面）



59. 同左（外面）



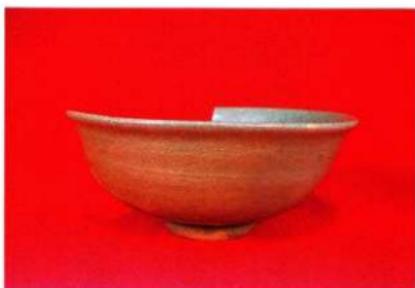
60. 白磁 皿・小壺（内面）



61. 同左（外面）



62. 中国製壺・天目碗・青白磁合子・朝鮮陶器



63. 青磁 碗



64. 古瀬戸 天目碗



65. 古瀬戸 碗・碗型鉢



66. 古瀬戸 血類



67. 古瀬戸 血類・香炉・水滴・合子ほか



68. 古瀬戸 盤類



69. 古瀬戸 瓶子類



70. 珠洲 すり鉢（内面）



71. 珠洲 すり鉢（内面）



72. 珠洲 すり鉢（内面）



73. 珠洲 すり鉢（内面）



74. 珠洲 すり鉢（内面）



75. 珠洲 すり鉢（内面）



76. 珠洲 壺甌（外面）



77. S K 94 出土遺物



78. 瓦質土器 火鉢・風炉（外面）



79. 瓷器系陶器 壺（外面）



80. 備前系 すり鉢（内面）



81. 中世土師器（かわらけ）



82. 石製品 砥石・硯



83. 石製品（砥石・硯・紡錘車）・土製品（土鉤）・瓦質土器・すり鉢



84. S X 31 出土 錫造剝片



85. S X 31 出土 溶解物



86. 銅製品 香炉



87. S K 94 出土 銅製品（提子・錢）・銅滓ほか



88. S K 94 出土 銅の付着した坩堝



89. S K 94 出土 提子



90. S K 94 出土 提子片口



91. 銅製品 碗



92. 錄つぶされた錢



93. 銅製品（飾金具・鉄）・銅滓



94. 鉄滓・溶解物



95. 坩堝・ふいごの羽口

第120次調査

所 在 地：市浦村大字十三字琴湖岳503

調査期間：平成12年9月6日～平成12年12月4日（約3ヶ月間）

調査面積：300m²

<基本層序>

調査区の層位を北壁・東壁の2箇所の土層断面図で示した（第6図）。ここでは十三湊遺跡の基本層序に対応させながら、各層序の概要を示す。

第I層：現代の生活面及び畑の耕作土で植物根を多く含む。堆積土は2層に分かれる。15～50cmほど
の堆積が見られる。

第II層：黒色の腐植土層であり、植物が一定の期間繁茂していたことが分かる。第II層上面より近現
代～現代の土坑・柱穴を検出したが、おそらく近世面にも対応する土層と考えられる。5
～20cmの堆積が見られる。

第III層：黒褐色の砂質土層で、20～30cmの堆積が見られる。第III層上面では広範囲に渡って集石遺構
を確認した。これら集石遺構はすべて中世遺物を伴うことから、第III層が中世遺構面及び中
世遺物包含層である。ほとんどの中世遺構には第III層の埋土が混入する。

第IV層：黒色腐植土のやや粘質のあるシルト土層である。約20～40cmの堆積が見られる。

第V層：明黄褐色の砂層で地山面に相当する。



1. 120次調査全景（西から）



第6図 第120次調査 中世遺構平面図

<調査の成果>

第120次調査は遺跡のほぼ中央に位置する旧市浦村立十三小学校の校舎北側で実施した。調査区は前年度調査区（第90次調査）の西側に隣接する場所を設定した。そして、本調査区の西側隣接地はすでに平成5年度に国立歴史民俗博物館が実施した第5次調査と接する。

周辺は平坦な地形を呈する砂洲上にあり、標高2.2～2.5mの低地である。地目は畠地となっており、調査区は畠一筆分の南北26m×東西11.5mの範囲を設定した。調査面積は約300m²である。調査の主目的はやはり十三湊の中心施設と推定される領主館の解明及び範囲確認調査である。

調査では近世～近現代の遺構面と中世遺構面の2遺構面を検出した。

近世～近現代の上面遺構は図示していないが、近現代の耕作に伴う土坑（S K01・02）及び、柱穴（S P01～14）を検出しただけで、遺構密度が非常に薄い。また、近世遺構は全く検出できなかつた。遺物の面でも近現代の陶磁器や近世の肥前陶磁器が若干量出土しているだけである。

中世面では、鎌倉時代後期から室町時代にかけての遺構・遺物を良好な状態で多数検出することができた。主な中世遺構では柵塀・溝状遺構の区画遺構、井戸2基、土坑・集石遺構、竪穴遺構2基、鍛冶・鋳造関連遺構のほかに掘立柱建物を構成する柱穴を多数検出し、遺構密度が非常に高い状況であった。中でも鍛冶・鋳造関連遺構では鍛冶炉（S X01）や工房跡と推される竪穴遺構（S I01-02）、炭焼窯と推される遺構（S K75）、砂溜め遺構（S K103-107-112）が注目される。

やはり遺物でも銅が付着した坩堝・鉄滓など鍛冶・鋳造に関する遺物が多数出土している。また、S K06集石遺構から15世紀中頃に廃棄された一括資料が出土している。

これら多くの遺構は重複が激しく、今後は共伴遺物や遺構の新旧関係から時期変遷を検討していく必要がある。ここでは中世遺構・遺物の概要を述べる。

(a) 区画遺構

柵塀や溝状遺構は屋敷割り・占地を規定する区画遺構である。ここでは多数の溝状遺構を検出した。また一方、柵塀のように上屋構造を推定できる溝底面に柱穴列を有するような「布掘り溝」は明確にできなかつた。

区画遺構には主軸方向の違いから、大きく東西方向と南北方向の二者に分かれる。東西方向にはSD01-05-11-14～17、南北方向にはSD05-07～10がある。これは方形に区画する屋敷割りの占地を示したものと考えられる。なお、SD12は後述するようにSX01鍛冶炉に伴うものと推される。こうした区画遺構は全体に他の遺構に切られているものが多く、時期的に古い様相を示している。

(b) 井戸

井戸跡は調査区から2基（SE03-04）検出されている。

SE03は調査区の北西隅で、グリットX76.98～77.02、Y18.88～18.90に位置する。

調査区西壁にかかり、約半分が検出された。平面形は不明である。規模は南北1.5m、深さ1.1mを測る。遺物では鉄釘1点、石製品の砥石1点が出土している。SE03はSI01よりも古い。

SE04は調査区の北側で、グリットX77.04～77.08、Y18.98～19.00に位置する。

平面形はやや不整な円形を呈する。規模は南北1.8m×東西1.7m、深さ1.1mを測る。

検出時には拳大の角礫がまばらに検出された（写真14）。さらに下層の井戸枠内からは角礫がぎっしりと詰まって検出された（写真15）。また、底辺より径40cmの曲物の痕跡が確認されている。そして、ここでもやはり井戸の施設に際して、井戸枠内や表層に多量の角礫を廃棄したものと推される。S E04からは多数の遺物が出土している。陶磁器では白磁碗1点、珠洲壺甕3点・壺R種1点・すり鉢2点、瀬戸平碗2点、瓷器系陶器壺甕5点、瓦質土器1点、鉄釘4点、鉄滓2点、石製品の砥石1点が出土した。また、井戸枠内の底辺より漆碗の漆膜片が出土している。S E04はS K20・21より新しい。

（c）土坑・集石遺構

調査区全域にわたって土坑・集石遺構を検出した。土坑と集石遺構は明確に区別することはできないが、角礫が隙間なく詰まった密集した状態のものを集石遺構として区別した。主な集石遺構にはS K06・07がある。S K06・07は第III層上面から検出された（写真8・10）。S K06は南北1.1m×東西1.3m、深さ55cmの規模を有する。S K06からは被熱した多量の角礫が隙間なく詰まっており、角礫と共に多量の陶磁器や鉄釘・炭化米等の遺物が出土している。なお、陶磁器には接合後に完形品になるものが多く、また、二次被熱を受けたものが含まれていることから、火事場整理の一括廃棄土坑と考えられる。S K06は時期的に最も新しく、出土遺物には中世後期の京都系土器が混入している。年代的には15世紀中頃を前後する時期と考えられ、十三次遺跡の終末・衰退期の遺構と推される。なお、出土遺物の詳細については後述する。

S K07は1.35m×1.1m、深さ0.8mの規模を有する。上面及び底辺の2箇所で拳大の角礫がまとまって出土している（写真10）。堆積土にはにぶい黄褐色の砂が途中混入する（写真11）。

その他にも調査区全域にわたって多数の土坑が検出されており、後日改めて報告したい。

（d）鍛冶・鋳造関連遺構

鍛冶・鋳造関連遺構には鍛冶炉・炭焼き窯・竪穴遺構・砂溜め遺構がある。以下、個別に概要を述べる。

鍛冶炉

S X01は調査区中央よりやや南東寄りで、グリットX76.74～76.78、Y18.98～19.00に位置する。直径1.2mの不整な円形を呈する（写真18）。全体に明褐色を呈する焼土が広がる。炉の表面は全体に平滑であった。西側半分は焼き締まりが強く硬質であったが、東側はそれほど焼き締まりが良くなかった。炉の周辺から坩埚2点が出土している。

そして、炉の下層から幅1.1～1.3m、長さ3.9mに渡って溝状遺構（S D12）を検出した。さらに溝状遺構の底辺には2基の土坑（K 1・K 2）を検出した（写真20）。埋土には拳大の角礫が散在し、炭化物や粘土ブロックを多く含んでいた。K 1土坑からは坩埚2点、銅滓1点など鋳造関連の遺物が出土している。また他にも砥石1点、鉄釘3点、銅錢7点、珠洲壺甕1点・すり鉢3点、瓷器系陶器壺甕1点、瀬戸平碗1点など多くの遺物が出土している。銅錢は銅製品の鋳造に際して、原材料として利用された可能性がある。K 2土坑からは鉄釘3点、用途不明鉄製品2点、朝鮮製陶磁器1点（写真21）、瀬戸天目碗1点・平碗1点、瓷器系陶器壺甕1点が出土している。このようにS X01鍛冶炉の下層か

ら検出されたS D12溝状遺構や底辺から検出された土坑2基は鋳造関連の遺物を多く伴うことから、鍛冶炉に関連する施設と考えられる。恐らく排水用の施設或いは排棄用の土坑ではないかと推される。

炭焼き窯

S K75は調査区の中央やや南寄りで、グリットX76.72~76.74, Y18.90~18.94に位置する。南北1.15m×東西1.1m、深さ30cmの規模を有し、平面形はほぼ正方形を呈する。検出時には拳大の角礫がまとまって検出された（写真22）。また、角礫中からは粘土ブロック片や瓦質土器火鉢1点、珠洲壺1点・すり鉢1点、鉄製品の刀子1点・釘2点などの遺物も出土した。角礫を除去した後に東側底辺より炭化材がまとまって検出された（写真23）。さらに完掘後には四隅に柱穴が確認された（写真24）。恐らく上屋構造を支えるための主柱穴と推される。ほぼ正方形という特異な平面形態やさらにまとまって炭化材が検出されたことから、鍛冶・鋳造用の木炭を確保するための炭焼き窯である可能性が高い。

竪穴遺構

竪穴遺構は全部で2基（S I01・02）検出された。これらは鍛冶・鋳造生産に伴う工房跡と考えられる。

S I01は調査区の北西で、グリットX76.96~77.06, Y18.88~18.96に位置する。

規模は東西の検出長3.3m×南北4.0m有する。また、北壁の東端に出入り口と推される張り出し部が検出された。張り出し部の規模は長さ1.5m×幅1.0mである。

北・南・東壁の周囲には屋根を支える主柱穴が巡る。深さは25~35cmほどになる。堆積土には黒褐色の砂質土を中心に、全体に炭化物を多く含んでいる。また、竪穴遺構の底面から新たに砂溜め遺構が重複して検出されている（写真31）。S I01からは多数の遺物が出土している。陶磁器では珠洲壺1点・すり鉢2点、瀬戸半碗1点・花瓶1点、中世土師器1点、瓷器系陶器壺壺1点が出土している。その他に銅製品の鏡3点、鉄釘28点・刀子1点・用途不明3点・鉄滓1点、石製品の玉類1点、炭化米が出土している。S I01はS E03, S D07-08、さらに底面で検出された砂溜め遺構よりも新しい。

S I02は調査区中央の西隅で、グリットX76.86~76.92, Y18.86~18.90に位置する。

規模は東西の検出長1.5m×南北2.6m有する。また、東壁の北側に出入り口と推される張り出し部が検出された。張り出し部の規模は長さ0.5m×幅1.5mである。

壁の隅には屋根を支える主柱穴を備える。竪穴の深さは20cmほどの浅いものとなっている。貼り床は認められなかった。底面からは竪穴掘削時の工具痕と推される痕跡が多数検出された。

S I02はS K57-118よりも古い。

砂溜め遺構

砂溜め遺構は調査区の南西、グリットX76.70~76.74, Y18.82~18.90に位置する。堆積土はにぶい黄褐色の粒子の細かい砂が堆積している。他の中世遺構の埋土はおよそ黒褐色の砂質土であることから、明らかに埋土の違いが見られる。これは浜地にある粒子の細かい砂を意図的に持ち込んだもの

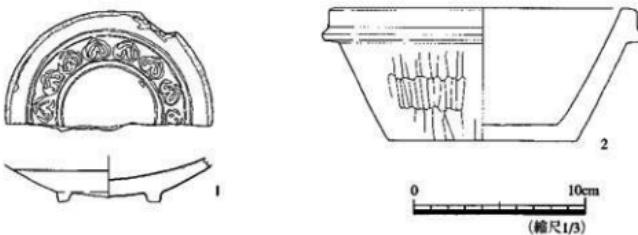
と考えられる。さて、検出時にはSK103・107・112とした3ヶの土坑の切り合い関係を把握した（写真25）。しかし、序々に掘り下げていくと、底辺より新たに5基の土坑の切り合いを把握している（写真26）。このように多数の土坑の切り合い関係は、砂の貯蔵による搬入と搬出による掘削を何度も繰り返した痕跡と判断できる。全体の規模は東西4.0m×南北1.8m、深さ60～70cmを有する。遺物は鉄釘・鉄滓を含め4点出土しただけで、ほとんど出土していないことからもゴミ捨て穴としての性格は考えがたい。また、周辺ではS101竖穴遺構の下層からも砂溜め遺構が検出されている。さらに、前年度の調査区（第90次調査）からも検出されており、鍛冶・鋳造に関連する遺構と推定される。

<出土遺物>

出土遺物では主に陶磁器のほか鉄製品・土製品・石製品・銅製品・木製品が多数出土している。やはり昨年度の調査区（第90次調査）と隣接しているため、鍛冶・鋳造関連の遺物が多数出土している点が注目される。

陶磁器では青磁・白磁の中国陶磁器、象嵌青磁の朝鮮製陶磁器、瀬戸・洲州・瓷器系陶器・瓦質土器・中世土師器の国産（施釉）陶器・土器が出土している。

特に第7図で示した象嵌青磁碗の朝鮮製陶磁器、滑石製石鍋は貴重な遺物であろう。



第7図 第120次調査出土遺物

第3表 120次調査 出土遺物

| 番号 | 種類 | 器種 | 遺構 | 層位 | レベル | 備考 | 整理番号 |
|----|-------|----|------|----|-------|------|----------------|
| 1 | 朝鮮製陶磁 | 碗 | SD12 | | 1,328 | 象嵌青磁 | 120次1585 |
| 2 | 石製品 | 鍋 | | Ⅲ層 | 1,646 | 滑石鍋 | 120次1067, 1070 |

出土陶磁器から見た年代は13世紀後半～15世紀前半に相当するものの、13世紀後半に相当する明らかな遺構は検出されていない。14世紀～15世紀前半が中心時期と言える。

また、注目できるのはSK06集石遺構から出土した一括資料であり（写真43）、ここでは主なSK06出土遺物を第8・9図に沿って記述することにする。

1～4は白磁碗C群に相当する。1～3の口縁部は外反している。4は底部破片で、二次被熱によって内底見込みの釉が剥げている。1は細かく碎かれており、18破片が接合した。4も同様に5破片が接合している。釉調は1・2・4は透明釉の灰白色を呈するが、3は透明感のない乳白色を呈する。

1・2の内底見込みには印花文が施されている。接合後に個体識別を行った結果、これらはすべて別個体であることが判明した。合計で4個体分の白磁碗が出土したことになる。

5～7は龍泉窯系青磁碗である。5・6は内外面無文で口縁部が外反する。器壁は薄い。また、透明感のある釉は薄く塗られており、全体にシャープな作りとなっている。5・6は龍泉窯系青磁碗D I類に相当する。5は細かく碎かれており、19破片が接合した。これは二次被熱を受けて、破損した可能性が高い。6は3破片が接合した。7は龍泉窯系青磁碗B類（蓮弁文碗）の底部片と推される。内面見込みには花文様が彫刻されている。高台はすべて欠損しており、意図的に打ち抜いた可能性が高い。個体識別の結果、龍泉窯系青磁碗は3個体分が出土している。

8は龍泉窯系青磁盤の底部片である。高台内には蛇の目状に釉が残されている。

9は瀬戸の卸皿である。内面露胎で、卸目が見られる。古瀬戸後期に相当する。

10～12は土製品の埴輪である。10は推定口径10cmでやや大ぶりであるが、11・12は推定口径5cmでやや小ぶりである。

13～15は中世土師器（かわらけ）である。13は底部に回転糸切り痕を残すロクロ成形である。一方14・15は手づくね成形の京都系土師器である。口縁部を大きく外反させ、端部をつまみ上げたようになる。中世後期に流入する京都系土師器はSK06の下限年代を考える上で重要な資料となるだけではなく、今後、十三次遺跡の廃絶時期を決定する重要な指標となるであろう。

16は砥石である。擦痕が多数認められる。石材は不明だが、やや粒子の粗い中砥と推される。

17は珠洲すり鉢である。口径35.5cm、器高13cm、底径14cmである。口縁部は肥厚しており、内傾して面取り調整を行う。口縁部には櫛目波状文が巡る。内面の卸し目が全面に及ぶ。珠洲V期である。

18は瓷器系陶器のすり鉢である。口径29.5cm、器高14cm、底径13cmである。瓷器系陶器鉢に特有な口縁部に沈線を巡らす特徴を持つ。全体に暗赤褐色を呈する。接合後、ほぼ完形品となった。明確な産地は不詳である。

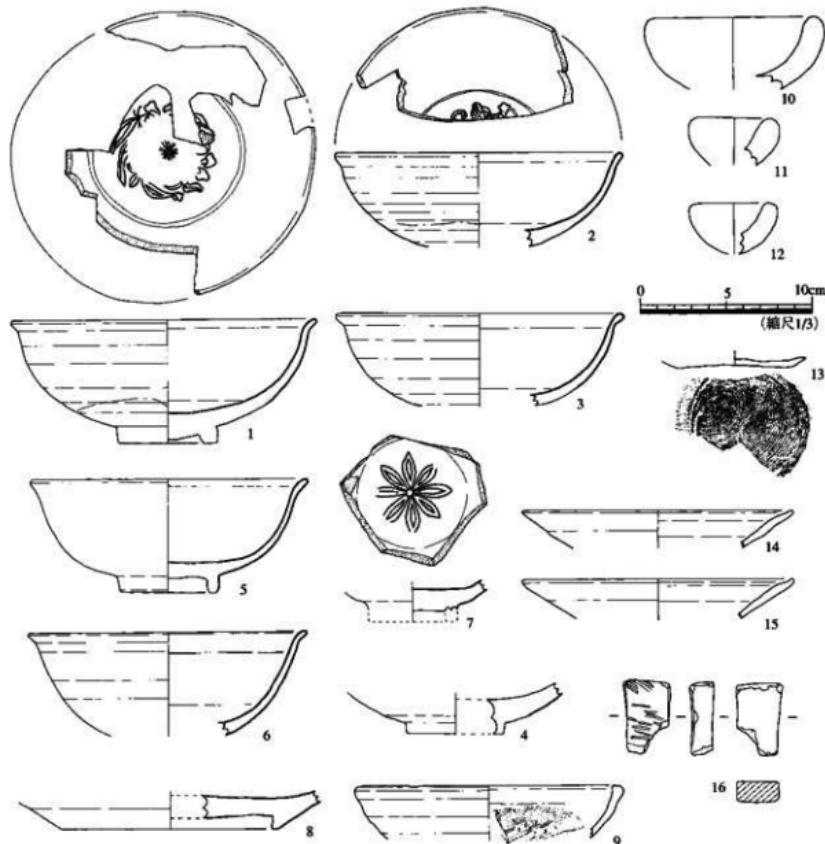
19は瓷器系陶器壺である。口径16cm、器高48cm、底径15cmである。粘土紐の輪積み痕が残る。やはり接合後にはほぼ完形品となった。15世紀前半の越前製品と推される。

20・21は粉引き白である。両者は同一個体と推される。推定直径30cmとなる。21には挽き木の装着口がわずかに残る。

以上、SK06集石遺構の主な出土遺物を概観してきた。SK06集石遺構からは少なくとも青磁碗3個体・盤1個体、白磁碗4個体、珠洲すり鉢1個体、瓷器系陶器のすり鉢1個体・壺1個体、瀬戸卸皿1個体、中世土師器ロクロ製1個体・手づくね製1個体分の土器・陶磁器が出土している。また、接合後にはほぼ完形に復原できるものが多く、火事場整理によって角礫と共に破損した土器・陶磁器をまとめて捨てた極めて一括性の高い資料と言える。

また、SK06集石遺構からは埴輪3点が出土していることから、鍛冶・鋳造関連遺構と集石遺構は同時期か或いは比較的近い時間幅の中で捉えることができるものと推察する。

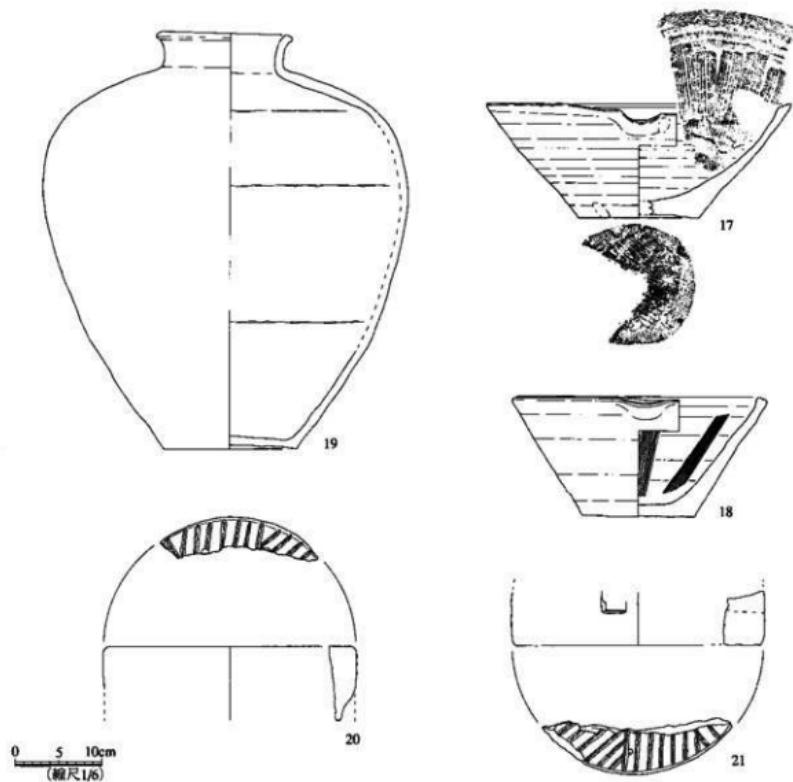
さらに、SK06集石遺構には中世後期の京都系土師器の混入が示すように、時期的に最も新しい十三次遺跡の衰退期及び終末期の遺構と考えられる。廃棄年代は15世紀中頃を前後する時期と考えている。しかし、青磁や白磁の貿易陶磁は性質上、古期のものが新しい時期まで残存している。龍泉窯系青磁碗D I類及び白磁碗C群の上限は14世紀後半に求められることから、純粹な年代のセット関係を有しているものとは言えないが、共伴関係を示す貴重な資料を提示するものであった。



第8図 第120次調査 SK06 集石遺構 出土遺物 (1)

第4表 120次調査 出土遺物

| 番号 | 種類 | 種類 | 遺構 | 層位 | レベル | 備考 | 測量点 |
|----|-----|----|-------|----|-------|----------------|------------|
| 1 | 白磁 | 碗 | S K05 | | 1,635 | 白磁碗C群 | 120次1189ほか |
| 2 | 白磁 | 碗 | | | 1,818 | 白磁碗C群 | 120次0744ほか |
| 3 | 白磁 | 碗 | | | 1,870 | 白磁碗C群 | 120次0765ほか |
| 4 | 白磁 | 碗 | | | 1,734 | 二次被熱により内面剥離 | 120次1324 |
| 5 | 青磁 | 碗 | | | 1,532 | 龍泉系青磁碗D I類 | 120次1273ほか |
| 6 | 青磁 | 碗 | | | 1,620 | 龍泉系青磁碗D I類 | 120次1288ほか |
| 7 | 青磁 | 碗 | | | 1,693 | 内面見込みに花文様、B期 | 120次1182ほか |
| 8 | 青磁 | 碗 | | | 1,833 | | 120次0760ほか |
| 9 | 漆戸 | 漆皿 | | | 1,620 | 古漆戸後期 | 120次1376 |
| 10 | 上製品 | 埴輪 | | | 1,572 | | 120次1177ほか |
| 11 | 土製品 | 埴輪 | | | 1,587 | | 120次1377 |
| 12 | 土製品 | 埴輪 | | | 1,447 | | 120次1406ほか |
| 13 | 土師器 | 組 | | | 1,783 | クロコ成形 | 120次0854ほか |
| 14 | 土師器 | 組 | | | 1,717 | 手づくね成形、京都系かわらけ | 120次1346 |
| 15 | 土師器 | 組 | | | 1,785 | 手づくね成形、京都系かわらけ | 120次1322 |
| 16 | 石製品 | 鉄石 | | | 1,887 | | 120次0727 |



第9図 第120次調査 SK06 集石造構 出土遺物 (2)

第5表 120次調査 出土遺物

| 番号 | 種類 | 基層 | 造構 | 層位 | レベル | 備考 | 監理№ |
|----|-----|------|-------|----|-------|------|------------|
| 17 | 珠飾 | すり鉢 | S K06 | | 1,619 | 珠洲V期 | 120次1181ほか |
| 18 | 湯器系 | すり鉢 | | | 1,875 | | 120次0703ほか |
| 19 | 愛器系 | 壺 | | | 1,872 | | 120次0609ほか |
| 20 | 石製品 | 粉挽き臼 | | | 1,335 | | 120次1423 |
| 21 | 石製品 | 粉挽き臼 | | | 1,374 | | 120次1412 |



2. 調査風景



3. 調査風景



4. 調査風景



5. 調査風景



6. 調査風景



7. 調査区南壁 断面層位（北から）



8. 調査風景（SK06 集石検出）



9. SK06 集石 断面層位（西から）



10. SK07 集石検出（北東から）



11. SK07 断面層位（南西から）



12. SK40 粘土・集石ブロック検出（北から）



13. SK53・SK19ほか 検出（西から）



14. SE04・SK20・21 検出（東から）



15. SE04 井戸枠内の礫検出（南から）



16. SK106（南東から）



17. SK73 磕・粘土検出（北から）



18. S X01 錫冶炉跡（北から）



20. S D12内の土坑検出（東から）



21. S D12-K2 朝鮮製象嵌青磁出土（南から）



22. S K75 炭焼窯か？（東から）



23. S K75 炭化物検出（東から）



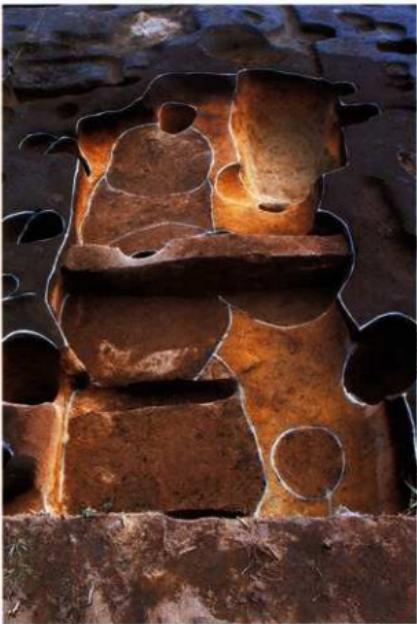
24. S K75 完掘（東から）



25. SK 112 砂灌め遺構（西から）



28. SK 112 底部から土坑が重複して検出（南から）



26. SK 112 底部から土坑が重複して検出（西から）



29. SK 112 断面層位（西から）



30. SK 112 調査風景（南西から）



27. SK 112 完掘（西から）



31. S I 01 壁穴遺構完掘及び下層の砂漏め遺構の検出
(北西から)



32. S I 01 完掘（西から）



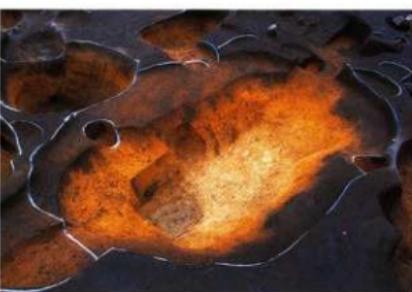
33. S I 02 壁穴遺構（南東から）



34. S K 80・S K 81 完掘（北東から）



35. S K 118 磚・粘土検出（南から）



36. S K 71 完掘（南東から）



37. 中世土器（かわらけ）出土（東から）



38. 滑石製石鍋出土（北から）



39. 青磁 碗（内面）



40. 同左（外面）



41. 青磁(盤ほか)・朝鮮象眼青磁・白磁碗・中国壺(内面)



42. 同左（外面）



43. S K 06 一括出土遺物



44. 古瀬戸 天目碗



45. 古瀬戸 平碗



46. 古瀬戸 盤・皿類



47. 古瀬戸 瓶子・尊式花瓶・柄付片口鉢



48. 瓷器系陶器 壺



49. 瓦質土器 火鉢・風炉



50. 滑石製石鍋



51. 朝鮮象眼青磁 碗



52. 珠洲 すり鉢（内面）



53. 珠洲 すり鉢（内面）



54. 珠洲 壺甕（外面）



55. 石製品（砥石・硯）・土製品（土錘）



56. 珠洲 壺R種（小壺）



58. 灰堀



57. 中世土師器（ロクロ成形 かわらけ）



59. 中世土師器（手つくね成形・京都系かわらけ ほか）

付章 十三湊遺跡の関連調査 ~第51・54・78次調査から~

<はじめに>

十三湊遺跡ではここ10年間で、第133次（地点）に及ぶ調査が実施されている（平成13年3月現在）。これは現在の十三集落および後背地（畠）を含む約55万m²が遺跡範囲となり、大規模な都市遺跡として捉えるようになったことで、急増する下水道敷設工事やその他の開発行為の影響によって、発掘調査が増加した結果である。

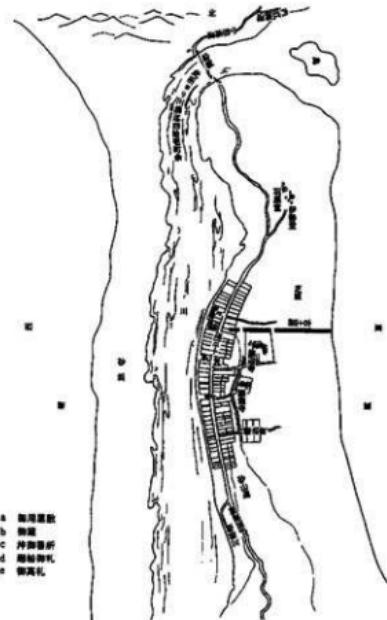
そのため、十三湊遺跡のほぼ全域にわたって考古学的な調査が実施され、全体像が明らかとなってきたという皮肉な結果となっている。ここでは開発行為に伴って行われた発掘調査のうち、十三湊遺跡を考える上で大きな手掛かりとなった成果について報告する。

<第51・54次調査の概要>

平成8年度から十三地区の漁業集落環境整備事業が実施されている。平成8年度には県道鰐ヶ沢～蟹田線の十三バイパス道路下において下水道敷設工事が実施されることになり、それに伴って発掘調査が実施された。「町屋跡」と推定される十三バイパス道路下を幅1mで、長さにして約900mの発掘調査であった。これは遺跡のほぼ中央を南北にトレンチ調査を実施した形となった（第2図。第19次～47次調査）。

引き続いて、平成9年度には十三集落に面する県道鰐ヶ沢～蟹田線の下水道敷設工事に伴う発掘調査が実施された。調査対象範囲は約1,200mであったが、住宅の密集地ということもあって、調査は18ヶ所（第48次～65次調査）が選定された。前潟に面した現在の十三集落の様子が初めて明らかにされた調査であった。ここでは重要な成果を上げることができた第51・54次調査の成果について報告する。

第51・54次調査地点は現在の十三郵便局～湊迎寺の一帯に当たる。ちなみに慶安元年（1648）の十三絵図によると、この当たりは「御用屋敷」「御藏」「沖御番所」「廻船御札」など弘前藩の港町支配に関する施設が点在していたことから、近世十三湊の中心部と言える。また、周辺の地形を比較すると、十三郵便局付近で標高2.5mを測るが、序々に南下するに従って湊迎寺付近で最も高い標高4.3mほどになる。この標高の変化については後述するように、中世末～近世初めに堆積した飛砂層の影響であることが発掘調査から明らかとなった。



第10図 慶安元年（1648）の十三絵図
(市立函館図書館蔵写本)
トレース図(小島1995より)

第51次調査

所 在 地：市浦村大字十三字深津77付近

調査期間：平成9年4月2日～平成9年4月14日

調査目的：十三地区漁業集落環境整備事業に伴う

調査

調査面積：30m²

国土座標：a (X=114305.690, Y=-42284.822)

b (X=114293.101, Y=-42293.600)

＜調査の成果＞

51次調査は十三公民館の西側で、前潟に面した十三集落の県道下で実施した（第11図）。調査範囲は東西2.0m×南北15m、面積約30m²である。調査地点の標高は約2.6mを測る。

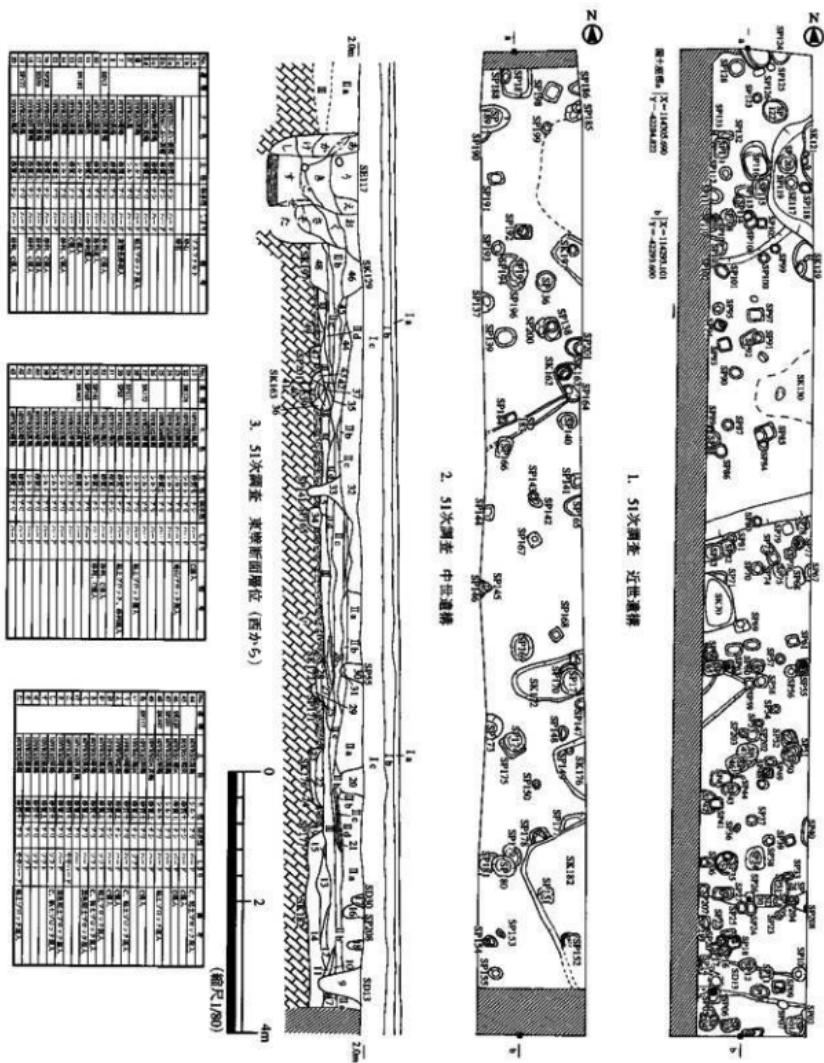
なお、遺構の実測作業は調査区の両端に任意の2点を求めて水糸を張り、それに直交するように点を求めた。任意の2点はトータルステーションによって国土座標を算出し、後日、地図上に調査地点を求められるようにした。

調査は道路面のアスファルト（第I a層）及び碎石層（第I b・I c層）を重機によって掘削すると、第II層面上（標高2.0m）で、近世遺構が検出された。碎石層と第II層の間には腐食土層もないことから、県道の造成に当たって、地表面をある程度掘削した可能性が考えられる。第II層はa～dの4層に細分された。これらは明黄褐色～灰黄褐色を呈する飛砂層と考えられる。第II層は約40～50cmの堆積が見られるが、遺物等は全く出土していない。続く第III層は約10～20cmの堆積が見られる。中世遺構は標高1.6m程で検出され、第IV層～第V層上面から掘り込まれている。また、第III層上面の包含層からたくさんの中世遺物が出土している。

中世遺構は第IV層上で検出した。第IV層は黒色腐食土層で、遺構埋土と見分けがつきやすい。第IV層は約10cmほどの浅い堆積が見られる。そして、続く第V層の黄褐色砂層の地山面になる。以下、ここでは近世面と中世面の遺構・遺物について、分けて記述する。



第11図 第51～56次調査位置図 (S=1/4000)



第12図 51次調査 平面図・断面層位

<近世遺構・遺物>

近世遺構では柱穴・溝・土坑・井戸跡が検出されている（第12図）。柱穴は円形及び方形のプランを呈し、浅いものが多い。また、注目される遺構にはS E 117井戸がある。S E 117は調査区の北東隅で約3分の1程が検出され、幅2.0mで深さ1.5mを測る。底辺から井戸枠の痕跡が確認されたが、調査範囲が狭く十分に検出できなかった。

S E 117は完掘できなかつたが、16世紀末～17世紀初めのまとまりのある遺物群が出土した（第13図）。ここでは概要を述べる。

S E 117の出土遺物には主に陶磁器のほか土製品（土錐）1点がある。陶磁器の中には中世期（14～15世紀）に遡る青磁（24）・瓷器系陶器甕（23）・珠洲（25）の3点が含まれているが、その他はすべて近世初頭（16世紀末～17世紀初め）におさまる一括性の高い陶磁器群である。近世初頭の陶磁器には越前すり鉢1点（21）の他はすべて肥前陶器（唐津焼）で占められる。

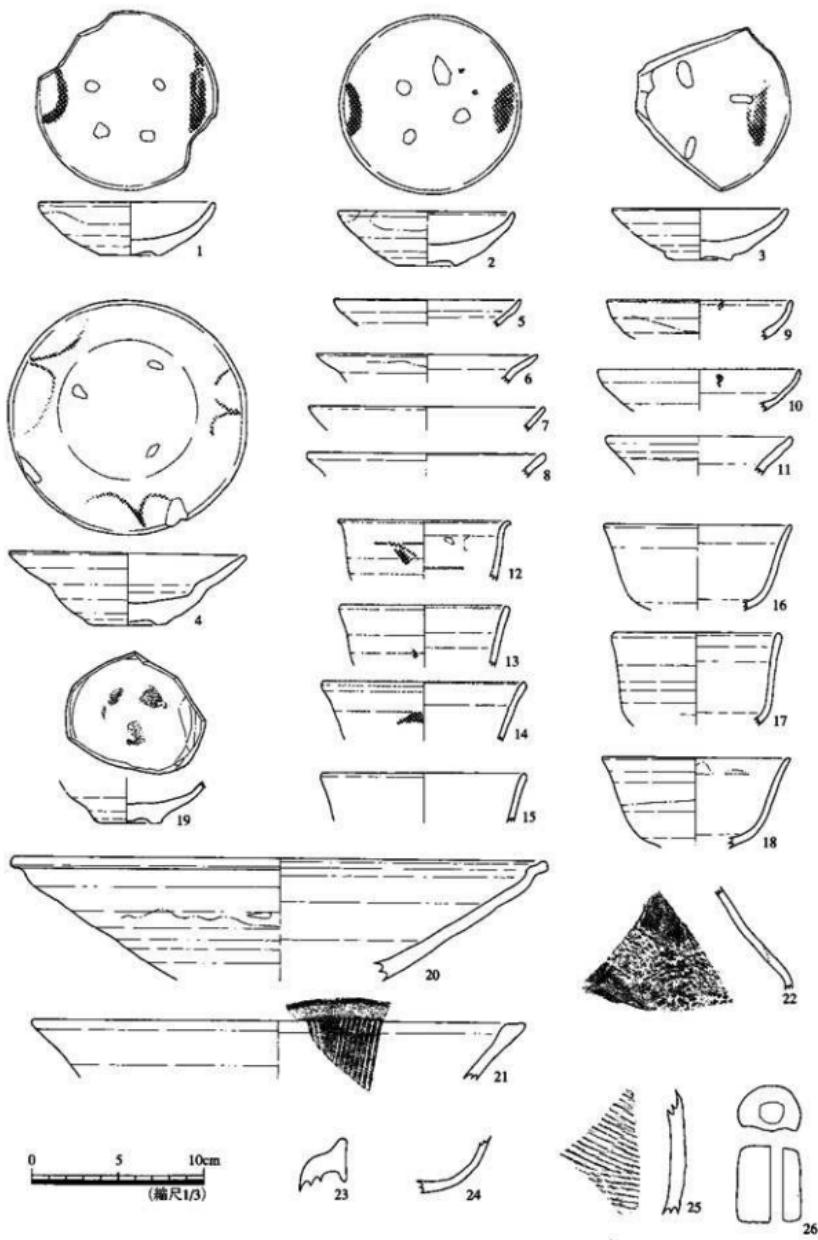
肥前陶器を見ると、1～3・9・10の丸皿は同一の規格品であり、内面の両端に簡略な鉄絵（鉄釉）を施している。また、1～3の内底面には胎土目積みの痕を残す。高台は露胎となる。高台内はヘラ状工具で削り取っている。これは佐賀県西松浦郡西有田町に所在する原明窯の製品と類似し、年代では肥前I～2期（1594年～1610年代）に相当する。4は胴部が大きく外反する腰折れ形で、内面に明瞭な段を有する皿である。また、内面の三箇所に草文と思われる簡略な鉄絵を施す。内底面には胎土目積みの痕を残し、高台は露胎となる。高台内はヘラ状工具で削り取っている。年代はやはり肥前I～2期（1594年～1610年代）に相当する。

12～18は碗の口縁部である。口縁部がやや外反する器形と筒型に近い器形がある。12～14には草文と思われる簡略な鉄釉が施されている。12～15・17は灰釉、16・18は銅釉を施す。年代はやはり肥前I～2期（1594年～1610年代）に相当する。19は碗或いは皿の底部片である。内底面に砂目積みの跡が見られることから、肥前II期（1610年代～1650年代）に相当する。20は口縁部が折れ曲がる口折れ大皿である。灰釉の上に線状に伸びる鉄釉の痕跡がある。高台は露胎である。

22は瓶である。内面には粘土紐の輪積みの痕跡や同心円状の青海波文（叩き痕）が残る。

また、外面には鉄釉が施されている。年代的には肥前I期～II～1期（1580年～1630年代）の範疇に含まれる。

21は越前のすり鉢の口縁部片である。内面の口縁下に沈線や段をもたないもので、16世紀末～17世紀前半の所産であろう。



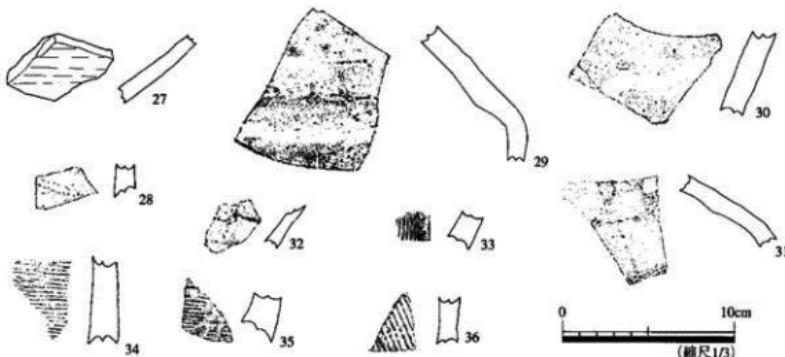
第13図 第51次調査 SE117井戸 出土遺物

第6表 51次調査 出土遺物

| 番号 | 種類 | 器種 | 遺構 | 層位 | レベル | 備考 | 整理番号 |
|----|------|-----|--------|----|-------|--------------|--------|
| 1 | 肥前陶器 | 豆 | S B117 | | 1,703 | 胎土目模み、鉄鉢 | 971231 |
| 2 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,228 | 胎土目模み、鉄鉢、完形品 | 971237 |
| 3 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,073 | 胎土目模み、鉄鉢 | 971232 |
| 4 | 肥前陶器 | 豆 | | | 0,712 | 胎土目模み、鉄鉢、完形品 | 971259 |
| 5 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,114 | | 971240 |
| 6 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,067 | | 971253 |
| 7 | 肥前陶器 | 豆 | | | 0,803 | | 971256 |
| 8 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,623 | | 971228 |
| 9 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,474 | 鉄鉢 | 971236 |
| 10 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,917 | 鉄鉢 | 971178 |
| 11 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,011 | | 971248 |
| 12 | 肥前陶器 | 豆 | | | 0,946 | 鉄鉢 | 971247 |
| 13 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,008 | 鉄鉢 | 971249 |
| 14 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,687 | 鉄鉢 | 971227 |
| 15 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,706 | | 971233 |
| 16 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,227 | 鉄物 | 971260 |
| 17 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,587 | | 971232 |
| 18 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,086 | 鉄物 | 971254 |
| 19 | 肥前陶器 | 豆・皿 | | | 1,372 | 砂目模み | 971242 |
| 20 | 肥前陶器 | 大皿 | | | 1,151 | | 971262 |
| 21 | 越前 | すり鉢 | | | 1,145 | | 971244 |
| 22 | 肥前陶器 | 豆 | | | 1,505 | 内面は同心円状のたたき | 971234 |
| 23 | 瓷器系 | 裏 | | | 0,780 | 中世 | 971255 |
| 24 | 青磁 | 裏 | | | 1,171 | 中世 | 971239 |
| 25 | 珠洲 | 裏・側 | | | 1,620 | 中世 | 971230 |
| 26 | 土製品 | 土鉢 | | | 1,201 | | 971243 |

<中世遺構・遺物>

中世遺構には土坑5基（S K163・172・176・182・197）、溝1条（S D183）のほか、多数の柱穴が検出された（第12図）。調査範囲が狭いため、遺構全体の性格はよくわかつてない。中世遺物は10点出土している（第14図）。遺構ではS P144から瀬戸盤類の体部破片、S P185から瓷器系陶器壺甕の体部破片2点がそれぞれ出土している。また、第III層上面からは瓷器系陶器壺甕の体部破片、珠洲すり鉢・壺甕が計7点出土している。これら陶磁器の破片は小さいが、すべて14世紀代の範疇に含まれるものである。



第14図 第51次調査 中世遺構面の出土遺物